

日本刀の研磨に關する資料

福田 瑞 二

(東京帝國大學工學部日本刀研究室報告第二十七)

刀劍の研磨に就きて古人の意見乃至其方法(砥順)等を述べたる文を今迄に目にすることを得たる刀劍書の内より拔萃せり。

其說殆ど規を一にせる爲自然重複をまぬかれざるも可及的全部を網羅せんことを欲せり、而して夫等はなるべく簡明に分類蒐録せんことを欲したりと雖も資料の性質上勢ひ冗長繁雜にながれたり。

先づ最初に其蒐録の順序を表示すべし。

- イ、 研の主要目的に就て
- ロ、 研の善惡及肉置に就て
- ハ、 研の順序に就て
- ニ、 拭に就て
- ホ、 研に關する雜錄
- ヘ、 ネタバに就て

右の内最後のネタバに關することは純然たる研磨にあらざるやも不知、然れどもこゝには研磨の一分枝とみなして共に抄けり。

(イ) 研の主要目的に就て

古刀銘盡大全卷之一に「研は劔の全體をあらはすの第一云云」察刀規矩に「古より研の法といふは其道具の鐵性鍛目肌沸匂等確と顯れ其鍛冶の徳を顯はすを專一とする也」刀劔雜話に「研は劔の本體を顯はし利鈍のかゝる所なれば云云」古今鍛冶備考卷一に「上古は研磨も刀匠の業なりとぞ研は肉置第一にして其刀劔の鐵合に従つて肉置の差別あり」刀劔固癖錄に「研の事全體の肉置專要肉置は則利用なり」(中略)研は元來鈍銳精粗または三等の位を分ち専ら利用を明にする爲めなり云云」(研記に「研は太刀、刀の地刃の紋様を残りなく見せしらせて地刃にむらなく肉置をととのへよくされてかけもこぼれもせざるやうにすることを本義なれ云云」。

(ロ) 研の善惡及肉置に就て

察刀規矩に

前略研ぎの上にて鐵性は南蠻鐵歟穴粟鐵歟出羽鐵歟しかと分れ、極目か板目作か或は居作スエツクリ丸作、まくり等に至る迄分明なる時は、正宗歟、貞宗歟又は正宗貞宗になくとも大なる違ひはなく志津兼氏歟則重歟の類にありと見わくべけれども、當時平一面に黒く鐵性わからず刃白くたゞれ鍛も沸も分りかぬる時は新古の別正し難し。(中略)其故に鐵性、鍛目、肌、沸等及焼刃、帽子の返り等に至る迄委く覺え其素性を研き出す事を知り得る時は、正宗とも變かへならず下作を上作と成し難き事を知るゆゑ人の誘きを不入作の徳を顯するものなり、是研の上手と云ふべし。

新刀辯惑錄卷之中に

前略上手ノ研師ハ手ノキクノミナラズ能キ砥モ多ク所持シテ手ヌキナクシテ其作相應スルヤウニ研上ルモノナリ、第一上手ノ研キタル物ハ棟關キハヨク切先マデリントシテユガマズ、鐵性顯レキレイニシテ地刃共ニ少モ村ナク肉合有、先ツヤト云テ帽子ノ中少モ村ナク横手格別ニ手際能ク鎚絹絲ヲ引ツバリタルガ如ク少クモヒツムコトナキモノナリ。(中略)田舎研ハ相應ニ研ク者ニテモ

能キ砥ヲ持タザル故ニ其作ノ鐵性顯レズ何ホドノ上作ニテモ位モナク見ヘルモノナリ、又下手ノ研キシ物ハ帽子ノ邊ハ勿論横手ノ筋杯モ不手際ニシテ地刃共ニ村モアリ至テ初心ノ者ノ研キシ物ハ帽子ノ内ニ砥枕ト云テ引目ノアトアリ又横手ノ筋ハ勿論鎗杯モ別シテヒスミ有リ地刃共ニ村有リテウネツクモノナリ云云。

察刀規矩に

研の善惡を知るには刀脇差共に棟關きはより先までりんとしてゆがまずむらなくきれいに正しく鎗も鋸もとより小鎗さきまでむらなく能すはり位ありてきれいに鮮かなるを善とす、今やうの如く古作新作ともに持前の鐵性其色合直刃亂刃の形をも見えわかぬ様に研きなしてうはべの見つきのみにかゝはりて本式に研ざるを善とする事なかれ。

刀劍秘傳志に

研の善惡を知るには刀脇指共に棟まちきはより切先迄りんとして唱までむらなく奇麗にして正しく鎗も鋸元より小鎗先までむらなく位有て奇麗に鮮なるを善とす。

硯記に

硯のよしあしを知るには始に地むらのあるなしを知るべし、あしきは必ずむらあり次に胙本より小しのぎ迄を見るにしのぎ直ならずして角立たぬは手の定まらぬなり、次に刃肉を見るべし本來むらありて刃ぶちに肉多くつきたるは之れの手の手定まらぬなり、つぎに砥目の残りたるかたあるは砥の數をはぶきたるなり、それより地刃を見るに地黒みて刃の境くもりあるは合砥と地つや刃つやの定らずして其上ぬぐひのあしきなり、又手の定まらざるものゝとぎたるには刃にまがり出してそれか上に刃立たず、始よりひけて刃見ゆるなり云云。

刀劍固癖録に

礪方生死ノ事此則肉置ナリ村ナキヲ生ト云村アルヲ死ト云、淨見寺ノ肉尤大事ナリ刃先ヨリ鑄マ
デ段々ニ肉ヲ配リ礪ノ界目堅縞ノ如ク十二三筋モ精ニ見エ鉏本ヨリ切先横手際マデ眞直ニ通リ
タルヲ善トス、村アル寸ハ右ノ筋ユガムモノナリ中奈倉亦右ニ准ズ小奈倉ノサシ砥ヲ鶉符ト云ナ
リ、至極ニ礪ツメ光リノ出タルヲ云、但鶉ノ背スデノ毛ニ似タルヲ云フ也、亦地礪ノ詰リ麥藁スシト
云但堅ニ麥ワラヲチラシタル如ク礪界出ルヲ云、何モ肉置悪キ寸ハ如右ニハナシ、尤肉合ノ事ハ此
迄上手ナリト雖モ別シテ難ズル所ナリ、相傳ニ切先帽子内ノ肉ハ必ズ鉏本礪留ニ有リト云フ勿論
肝要ノ事ナリ。

新刀辨疑卷之一に

刃肉の事は亦上工の磨にあらざれば其利を失ひ其精神を隠す、杉の如くに肉の落過ぎたるは溢れ
易くして損多し、又刃肉丸きは喰留むる心ありて切鈍し刃肉の悪しきは多く地鐵を強く磨落し刃
鐵の方ばかりにして丸く成りたるもの故切よからぬ也云云。

察刀規矩に

切先の肉置鉏もとにありと云こと有り總體のしゝおき釣合のよきにあらざれば全き研とは云は
れず、切先のしゝおきよきといふははゝきもとよりの肉合をうけて切先までむらなくむつくりと
研きて帽子形釣合よく小しのぎ形もよく見ゆる様に研く事なり、大切先小切先ともに能く研きて
しゝおきのよき道具は打合ても切先打れず、しゝおきあしければ強く打込たる時は先折るものな
り、此の如き所を辨別せずして見つきのみにかゝはり研ぎの善惡を定るは不吟味の至なり能く能
く此のわけを考へ研きには次第のある事を知るべき也、此の善惡を知らんとならば刀のさし表横
手筋の刃先さがり三つ角あがり、さし裏は刃ささあがり三つ角にてはさがりたるやうに見ゆるは
よきしゝ置きなり、かくの如く上手の研ぎてしゝ置よき道具は横手筋くろきすじ髪のを置きた

る如くに見ゆるものなり、筋ぎは刃先小鑄きはもけてたゞれたる様に見ゆるはし、ちきあし、かやうの研ぎにては切先もよわく折れ易きものなり。

研記に

前略ぼうしの肉置は鋤もとよりこゝろを付て本末のしゝあひよきにあらざればかけもこぼれもする難あるに又つよく打ときは帽子ささのおれてとび敷ことあり、研の仕立はともかくにも地むらなく肉置の程こそ要めなれ、又肉をつけんとの心かまへより刃ぶちのみに肉有はかたきもさもなきもされがたしこれを丸刃といふ。

刀劍雑話に

前略凡肉置は其太刀の造りに應じて置なり、譬へば重厚く幅狭く三角に造たると重薄に鋒延たる造幅重中分にしてしのぎ高き造或は平造菖蒲造鶉首造等夫々の造に應じて肉置の差別あり、前にもいへる脛巾本打所鋒と三段に肉置の別を演るといへども爰と目に見ゆる物にあらず、其肉相腰本より銚子に至る迄其見渡し一様なり是を心の肉置三段の教といふこと甚大事成所也、亦銚子に研むらありやなしやを見るには銚子先を障子の堅子の中程へ當て透し見れば銚子の中へ堅に數のすぢを引たる如く直に映りて見ゆるなり、むらあればうつる筋曲りてみゆる也、良師の研たるは棟關際より鋒迄りんとして村なく正しく居り位あつてあざやかなるものなり云云。

(六) 研の順序に就て

新刀銘鑑卷之一に

- 一、ラレタイ 二、ウナカミ 三、ジヤウケンジ 四、中ナクラ 五、コマナクラ 六、合セド地研 七、水仕立 八、ヌグヒ 九、ミガキ

劔工秘傳志卷之下に

研師砥の次第之事

禮ムナカミ神子ノ濱

淨けんし

名倉

大ナククラ
中ナククラ
小ナククラ

合砥地トキ
刃トキ

上は引地ツツヤ
刃ツツヤ

すくひ(ぬくひ?)津島石
カナハタ

磨いほた

刀劔固癖録に

砥石ノ順ハ　ラレクイ　ウナカミ　淨見寺　中奈倉　小奈倉　刃砥　地砥　水仕立　油拭(中略)

仕立方ハ上引ヲ以テ砥目ヲ取り大抵ヌリ砥ヲ三日餘モ當レバ地鐵ムクヤキテ和ラカナリ、然ルヲ

豎目ノ艶砥ヲ以テ至極丁寧ニ晴スナリ刃艶等餘リ繕タルハ卑シ元ヨリ仕立方様々ノ法アリトイ

ヘトモ何レモ便利ノ早業ナレバ爰ニ略ス、拭ハ青砥ノ粉ヲ至極細末ニ碎キ木ノ實ノ油ヲ以テ解キ

仕立アゲ水氣ヲ取ル爲ニ熱湯ヲ灌クコトアリ、右ノ煖リノ冷ルマテ拭テヨシ又ハ地刃ノ居リ合ヲ

期トス餘リ過タルハ卑シ、古ハ白仕立此ヲ白砥ト云其ヨリ淺黄仕立トナル又其後拭仕立トナリ當

時ハ多分黒仕立ナリ、此皆早業ヲ好ムカ故剛艶砥共ニ疎末ナルヲ隱サンガ爲ナリ則己前ノ鞘棚砥

ナリ(下略)。

校正古刀銘鑑四に

今大阪研といふものにて研を丹波今研といひ其研を合研といふ清誤なり、刃はかたきものなれ

ばやはらかき白研梨地目といふものにて研く山州梅か畑といふ所より出大阪砥といふもの上品なる

城丹波の國地はやはらかきものなればかたき内曇といふ砥にて研梅か畑より出地に黒流の様な其

上を淺黄といふ砥にて山城鳴瀧より出刺刀砥地刃を合せ研故合研といひ其砥を合砥といへり(下略)

刀劔雜話に

前略研の順も上建寺砥として錆を落しむらあればむらを押抜き其肉合全體を相究るなり、夫より中

名倉砥にて上建寺の砥目を抜き夫よりこま名倉砥にて中名倉上段の筋違の砥目を豎に研なし、其

上をきしり砥をするなり、夫より合せ砥地研を以て研上るなり、最良研師は荒砥は勿論伊豫砥にても用ゐず、上建寺を以て下砥をするなり、荒き砥を下砥に用ふるときは仕立上まであら砥の氣残りて仕立心の儘に出來ざるものなり、夫より仕立上刃を引立切先下なるめして横手すじを薄き内曇にひきつぶし脛巾もとより刃研のとふりに残らず研なり次に刃つや地つやし遣分其次に拭を入れ棟しのきに磨を入れるなり。(下略)

新刀辨疑卷之一に

砥礪次序

折枕 京大阪にては荒といふ深き腐れ打下の荒押又は深錆を磨落す豊後等より出るといふ。神子濱 あれくいの砥目を落す也此礪京師にては専ら用れと江都にはあらず、折枕うなかみの

間の物なり。

ウナカミ

京大阪の神子濱の代に用ふ關東にて専ら用ふ折枕の礪目を研落す也。

常見寺

神子濱ウナカミの礪目を落也、横手鑄の筋よく立なり越前國より出づといふ。

名倉

二品あり中名倉は筋違に磨て常見寺の礪目を落し、細名倉は豎に研て中名倉の礪目を落す、是を麥わら研といふ上品の細名倉世になき故此麥藁研は略す。

淺黄

昔は上品多き故地磨刃磨上引共に此砥を用ふ今は上品なき故白礪を用ふ。

枇杷砥

柿礪ともいふ淺黄の地艶上品なき故に此砥を代に用ふ是上品は今なし。

内曇

是又上品出ざるか兩三年以來中品出るを以て刃艶に用ひぬ、礪に従つては地艶にも用ふ内曇は古風刃研の礪也。

白礪

淺黄枇杷内曇等の上品得難きゆゑ此砥を以て合研を略す。

上引

淺黄内曇白等の波(皮?)にて一弓キに薄く分る也、兩面より堅氣の石肌を磨り落し指

先きにつけ塗礪に用ふ切先のなるめにも用ふる也。

對馬礪

對馬の海邊より出る此砥細末にして胡麻の油に合せて芳野紙に絞り其油を以て拭を入る也。

磨

對馬礪の汁にて拭を入れ鍛冶の研針にて錘と峯とを磨くなり、打粉にて油氣を取つては磨き艶出るまで磨く也。

研法は古作新刀によらず近頃略法數品有之と雖全く古法に及ぶべからず、(中略)拭に就ての部に拔載、今古法の略を書す。

劔一體の格好はうなかみ常見寺を以て刃肉切先を克定め、扱名倉を以て古法の如く麥藁筋まで常見寺の礪目残らざるやうに磨、又白内曇にて名倉の砥目残らざるやうに研、地艶には上品の淺黄か又淺黄なくんば上品の柿礪を指の先きに付刃の模様へ少しも懸らざる様に地鐵の所ばかり隨分念を入模様形に拾つて磨く也、是を地艶といふ然らざれば拭早く入らざる故也、拭は對馬砥の上品製出來たるを奉書紙の切木綿に浸し指にて刃へ懸らざるやうに地艶を入れる也、此拭速に入らざれば刃の上穢れて惡き故地艶別て念を入れる也、拭は薄く入置くべし磨上ると拭は濃見ゆると心得べし、又刃の上は刃艶を初めに白内曇にて研しまゝにして聊か拭の色移らざるをよしとす斯即古法の大略也。

此説の一部に對し異説あり即ち近古鍛法刀劔得失考に、

鎌田子(新刀辨疑の著者鎌田魚妙)の常見寺砥にて横手しのぎの筋能建と述るはいまだ吟味の至極せりといひ難し、如何となれば元來横手といふ譯は鍛冶研師其餘功者家の號にて常體は押つゝめ銚子先杯と通呼なり、要利を大事と論ずる時は研堅横の境筋有依則横研の所は横手也、如此譯在りて劔一體の肉合の規矩にて磨師の巧拙の懸る所也、是上の肉合といふは横手筋を經緯の研にて現

し求めて肉形に角杯を設る事なく、常見寺は扱置名倉研にても横手筋の界は下地に合せ置迄にて研すまし得と筋をあらはさず、漸合礪に取りて經緯の筋調ふ事也、是には揚子切手板切杯とさまざま在て良研師は一入大事になす也、然るを常見寺にて筋を建る時は求めて角も出来る道理故筋の上大肉薄く甚惡敷と知るべし云云。

察刀規矩に

打おろしを研ぐには先づおれぐいにて棟鑄平ともに鍛冶研のむらをぬき、大抵に刃をつけ其上をうなかみにてとぎておれぐいの砥目をぬき肉合をあらまし極る事なり、右の上を上鏡寺にて鑄平ともにはどきもとまちした一寸斗りきれいに刃まち丸くせぬ様に研出し、しゝあひ鑄きはより刃先までむらなくむつくりととぎ横手筋滞りなくすなほにあざやかに見ゆる様に研ぐべし、尤もじやうけんじとさにてしゝあきを極め小むらをととりて道具の全體を定るなり、此見分様は上鏡寺研の時砥目能くそろひて小すじかいにつくなり、但むらあれば砥目そろはぬものなり、砥目に生死といふ事あり、砥目うさやかに光有てはつきりと見ゆるを生といふ、如此ならざるを死といふ、なぐらあはせ研の生死も亦是に同じ、砥目の生死は秘事にする事なれどこゝにあらはす心付て見分くべし。

一、中名倉研に大筋違、すぢかい、小筋違の段あり、右上鏡寺とぎにて肉合極り、しゝ置のよき道具は砥目よく揃ひ立島の様に見えてきれいななり、砥目目の生死前に同じ。

一、又細名倉砥にて、たつといふになほしうづらといふ研かたあり、しゝあひよき道具は細名倉に砥汁をためて段々順にとげば砥目右の如くにつかすむらありてもつきかぬるなり。

一、合せ研刃は内曇が紫か白砥かにて刃よくつき鑄ふちもけぬ様に地刃かけてとぐ也、手よくすはりむらなくとげばしのさふちに白く粉の吹たる様に見え刃さき剃刀の如くつくくなり、能くとげた

る時は肌出てしんより見事なる上手の研ぎに非ざれば如此ならず、又下手のときたるは鑄ふち刃さきうけてしのぎふちはさきとも黒く見えそのうへ刃もつかず横手筋もけて正しからず、此もむきを能心得て上手と下手の研所の差所を考へわきまうべき事なり。

一、地研淺黄か又は柿色のかたき砥にてとぐなり、研様は刃研のこゝろもちと同じ事なり、肉合よくむらなき道具には縦に七八寸計りづゝ麥わらをならべたる如く鑄きわより刃先まで島の筋つくものなり、之を麥わらすじといふ、しゝあひあしくむらあれば筋つかず、是亦研の善惡のわかるゝ所なり。

一、前略(肉置の部參照是迄で地研の分なり。(下略))

一、仕立上げ刃を引立ると云は、内曇にて刃つやの通りにすり引臺の上へ薄板を敷き、切先をしたになして横手筋の所と随分薄き砥にてひきつぶし、鉋もとより刃とぎのとほりに残らず研ぐなり。

一、刃つや砥にて片平づゝぬり砥をつかふ、使ひやうはかたひらを道具により一日づゝ兩ひらを二日ほど使ひ、鐵こなれてよきじぶん地刃をわける事なり。

一、地つや鐵に合たる砥を考へ鑄ぎはより刃ざかひまで自然とはかれる様につかふなり、地はだあらけて肌口あきたるは下品なり、はだおほき道具にてもはだしまりて細やかににつとりと地刃ともにあや有りのまゝに見ゆる様に仕立てるをよしとす、兎角地刃ともに元來の鐵性有ていに、わかればだもやうもありのまゝに見ゆる様にとぐを本意とする事なり、今時の研ぎと云は直刃亂刃の形をもとりかくし、はだもあらけ昔の鞘棚研といふやうに研ぎたるを吟味する人もよしとするは、大なる僻事なり、剩へ極むる人も眞の研ぎに仕げたる道具を若きやうに見ゆるとて用ゐず、右の下研を好として高代に極むる人まゝあり、是れいかなる心ならん。

ぬぐひの入れやう云云(拭に就ての部參照)。

一、棟鑄磨の事したときより随分こまかに仕立ぬぐひまでいれて眞菰の灰汁にて油氣をとりてみがくべし。

一、上磨はあくずりしていぼたを打ちよくふき切りてみがかくなり但しみがきは南蠻鐵を用ゆべし
一、眞の棟丸棟の研ぎやう兩品ともに棟さき眞のとまりを第一の習ひとす、棟先より三四分さげてとめる事なり但し兩方のかどより留るものなり眞にてとめるといふ事はなし。

一、小刀の研ぎやうさまざまあれども横にとぐより外はなし尤も刀の切先の如く研ぎ上る事なり、切先刃關操込むつくりと本の關より八分ほど上にて留むべし、其外縦研にみがかきなどしたるもあれども下品にて賤し。

研記に

一、砥順のわかちは打おろしの始め鍛冶研とておれくい名砥石のにて一當りとぎて出すことは古よりの定めなり、其鍛冶とぎの上を又もおれくいにて棟しのぎをよくとぎて刃をつけ乍らむらを直し、次にうなかみ名砥石のにて尙もむらを去り肉置を定め乍ら前のおれくいの砥目を去り、次に上鏡寺名砥石のにてしのぎ平共に胼本より横手迄の肉合をさめむらを正すなり、又ぼうしも此順に同じく研ぐなり之れにて形をととのへて後次々の砥をかゝること定めなり此段の研は何れも筋違に砥をあつること習なり、上鏡寺の砥目はいかにも細かに揃ふをよしとするなり地にむらあれば砥目そろはずしてしかも色の替りて見ゆるは共に地むらありと知るべし、又研するものの得ると得ざるとの分ちにて砥目にうるほひありとなきとなり、うるほひありて砥目細かにうきたちて見ゆるは良工のいさほしなり砥目光りなきはしわざのつたなきなり、此砥にて形定まるなれば此砥目をよく見てあしかる方あらば改めたゞすべきことなり。

一、次にかくる石は中名倉中名倉(細名倉?)などなり、之れにて大筋違にとぎ上鏡寺の砥目を去り次

に又中筋違にして大筋違の目を取り、又次に小筋違にとぎて中筋違の砥目を去るなり此三段の儘も肉置を正し定むるなり。

一、前の中名倉の小筋違の次に細名倉堅にて堅研なり堅に研ぐを研ぎ言葉にたつといふこと習なり、それよりうづらふといふ研様にするなり之れは砥しるをさらずながくたてにいさゝかづきしるふきしると云に砥目うづらの羽の紋の如くつきて光り出くるなる故にうづらふと云ふ字に少しもむらあるときにはこの砥目たちがたし、大かたの巧には砥目そろはず鶉ふむらたちてけしからぬさまとはなるなり、人かた(一と方?)の研には此砥目を除きてたつに礪のみなり。

一、前の鶉ふの後に合砥にはかくるなり合砥はかくるとひくと〇て(一字不明或云て?)研とはいはず、其合砥には内曇紫白砥の三種あり、此合砥にて棟鎬平共にひたすらくひきそれより刃をよくつけて次に平より刃へかけて引くべきことなりかくするときは刃よくつきて地肌もあらはるゝなり、たくみのつたなきものゝ合せ砥引たるは鎬の上と刃先へ砥よく届かずされば刃もつかずしてしのぎと刃先の色地の色に異り濃く見ゆるなり、又地にもはだをよくあらはさずして村に見ゆるなり又横手のすじすわらず、良工のとぎたるは横手のすじを切らずしておのづからとゝのひたゞしく立なり、つたなきものゝ横手はすじまがり又はみつがしらあり上り下りしてうら表も又たがひそろはず、

一、次に地とぎと名付て淺ぎ砥又は柿色砥の内にて合砥をひく如くむらなくむぎわらを並べたるやうに幅しち分程づゝに筋立たせてひくなり、之れも地とぎにむらあれば筋たゞずこれもむぎわら立つといふ、此砥目も大かたのものも砥たるはそろいがたし初のおれくい砥のとぎより此の地とぎ迄にてもとつ礪はたれるなり。

一、地とぎの後したてのしざまはひきだいの上に薄き板をしき内曇砥の薄きをおきてぼうしをな

るめなるめと云は研言葉なり横手をきて胖本より刃をとぐなり。

一、次に刃つや砥にて刃もんの内をひたすらにひくことなり、それより地つや砥をしのぎのきわより刃境迄幾度となくかくるなり、かくするときは鍛と地鐵の本性をあらはすなり、此砥のかけざまあしきときは地色むら立ちて分りがたし、又研ぐ手つぎよくあふと合はざるとの分ちあり鐵にあらいがたき砥にては良工なり共其しさまほぼむなしきに似たり。

一、前の地つや砥の後刀にあつき湯をそゝぎかけてあたゝまりのさめるほどにぬぐひをば入るゝなり、(中略)此處拭に就ての條参照、それをよくぬぐひとりてみがきをばかけるなり、みがきは一寸に初めかけて五分づゝかへしてしばゝかけるなり、研鐵は南蠻鐵にて作りたるものかみとはするなり、南蠻鐵にも二三種の分ちあり、(下略)。

一、磨きをかけずぬぐひをいれずして水じたてといふにしたつるもあり、これはぬぐひを入れる迄にして内曇砥の薄きにて砥汁をつけず水をそゝぎて流しつゝ地つやを懸るごとくして刃先まであまた度かくるなり、かくすれば地つやの色よりすこしくもりて地刃のもんあらはれ青の水の色のごとく見ゆるなり、古しへはぬぐひを入るゝことなくかく水したてのみにしたるに慶長の頃よりぬぐひを入れ初めたりといふ説あり、されども其前かたに研たるまゝなるを清音これかれ見たるにぬぐひを入れたりと思ゆるものあり、研の年へたるはかくさまに見ゆると思へば磨きてもあればなり、又水じたてと心見ゆるもありけり。

一、ぬれ砥とぎにては地つやの上を内曇にて砥しるを多くつけてく○(一字不明)引にしてたつるなり世に中砥といへり、これは砥をなかばなしたりといふことならんなれどなかとといふことはこのすじにくらきもののみ云ふことにてことを辨へたるものはいづれもぬれ砥といふなり。

一、刃前ぬり砥といふあり、是はむねしのぎの上に磨きをかけて刃の方のみぬり砥にしたるなり、此

しさま古くは見えず。

一、研のしさまも家々にわかれて其流れをくむなれども砥順は皆同じ、たゞ地つやのつかひさまぬぐひのいれさまなどのならばしありて種々にわかるれどもかくわくるはひがことなり。(下略)。

一、砥順は前に記すが如く必なすべきことなれども、近き頃はそこら砥をはぶきてよくもせざる上にあはせ砥をもよくひかず大かたは地つや刃つやをもわけず研をならひとはするなり、研はしたてさまより下地にむらなく肉置に心をつけてすべきことなれども研にくらき人の多ければ研するかたには早く其心をしりて錆たり(る?)かたのみ上鏡寺にて大筋違にとき中なぐらにて大かたに砥目をきり直にたつをつきいさゝか合せ砥をひきてかの鐵はだのぬぐひを摺こみてすまし置なれば砥目も残り地刃もみ分がたし、地むらはごとく付て肉の刃ぶちのみに付と又肉無との二つとは成行なり、これを慶長より明和の頃迄は鞆だな(店)研とは云ひしなり、(中略)是をまち(町)研といひしとなり。(下略)。

(二) 拭に就て

刀劍雑話に

磨の事は上古よりあれども拭は本阿彌光甫より始めりと聞けり、此前は今の塗り研のごとき仕立かたにて光澤ありて拭の入たることくみゆるものなりとき、けり此研かたは其劍の性體を研の上に顯す研方なり後世に至り拭といふこと始りし故に中には奸曲の研師ありて拭に種々の術を以て人を欺くことあり、因て不審成劍は研て吟味すること肝要なり古書の鑑定傳に地鐵の色に紫赤のことあり或は白き玉を青き絹を以て包みたる如き心ありて其別をあらはすなり、拭を入れて其拭のいれかたにて鐵色の精色を失ふことなきなり爰を以て考ふれば傳法を守り正しく仕立てるときは拭ひに害はなき物也。(下略)。

34 硯記に

一、前の地つや砥の後刀にあつき湯をそゝぎかけてあたゝまりのさめるほどぬぐひをば入るゝなり、ぬぐひは硯にする青き石をきわめて細かにして椿の實の油にしたしおきたるを奉書紙をさきて大かた五分ほどのまるになしたるうらへつけ其上に同じ紙のうちをあて其おもての方を刃にのせて大指の平にておさへもとより末まで幾度となく取替へ、刃方へすり込みてをりくゝ手の平にてぬぐいはらしてほどを見定めよく地へうつりたるとき灰あくの水をそゝぎ油をさり紙にても絹にてぬぐい、次にいぼたの木の實のほしたるを絹につゝみて打粉の如く打付けそれをよくぬぐひとりてみがきをばかけるなり、(中略)又ぬぐいには家々の傳にてたがひあり其分ちは對馬拭とて其れより出づる硯に造るべき石の粉を用ふもあり、又赤間關を用ふ方あり、又甲斐の國より出づるを用るもあり、大方のときの家には鐵のひはだを焼返して高島石の粉を加へてぬぐいとはするなり、かくするはやくぬぐいを入れんとたくみなり、又あしき砥には鐵はだへたん又べにがらのたぐいを加へそれが上にたんはんなどをも入れて油にしたしそれをぬぐいとはするに尙もはやくゝ入るゝなり、鐵はだ多く入れたるは地色黒くして分りがたしされども近き頃は鐵はだを少しも入れぬ方は少し、又ぬぐいは木綿わたに付けて吉野紙にて二重三重包みて入れる方ありそは大方このしざまにはするなり。

刀劔固癖録に(再録)

前略拭ハ青砥ノ粉ヲ至極細末ニ碎キ木ノ實ノ油ヲ以テ解キ仕立アリ水氣ヲ取ル爲ニ熱湯ヲ灌クコトアリ、右ノ煖リノ冷ルマテ拭テヨシ又ハ地刃ノ居リ合ヲ期トス餘リタルハ卑シ。(下略)。

校正古刀銘鑑四に

前略鐵屑といふものを用れば湯をかけずとも地に拭入るものなり、本式に對馬砥を用れば湯をか

けざれば拭入る事なし、沸湯を用れば鐵なまるとして本式の拭をさらふ人あり、試に小刀を鍋に入れて終日湯にて煮とも少もなまる事はあらざるものなり、況一度沸湯を澆をや。(下略)。
拭を入るゝ打熱湯をかけることを非とせる説あり。

近古鍛法刀劍得失考に

前略近世は熱湯を懸け其煖りにて拭時は拭の入方速にて又肌口へ油氣も入錆の遅き杯と逃言を儲け専ら熱湯をかけ拭ふ也、是を(は?)間をとると同意にて火を以て煖る事は鍛冶ならでむらなきやうには難成故研師は熱湯を用ふるを知るべし、如斯爲る事も度重れば必劍の利を失ふ也。(下略)。

刀劍根問草に

前略又寶曆明和頃と覺ゆ本阿彌研とて専ら流行せしは地肌を洗ひ出したる如く研出し、刃色を白く見せん爲か地色は青黒く濃藍をぬりたる如く見ゆる研を素人は喜びたれども功者は賤しとて不譽事にてありしが後には町研も覺て研たり、是を湯掛と云ひて刀の爲によろしからざるよし其法を聞に沸湯をかけて手を付けがたき程あたゝかなる内にかな肌と云ふものを付けて磨く事に醒れば幾度も湯をかけ仕上るよし、數遍砥にかゝれば不切と……………一度にても障りはする共徳なき研也。(下略)。

猶鐵肌拭を排したる説有り即ち古刀銘盡卷之四に

前略近世鐵肌拭といふ事あり、是は鍛の時鐵砧の邊へ散たる鐵皮へ膽礬綠礬を加へ燒細末にして油に合せ、對馬砥の代に遣ひ拭速に入る仕方也、刃の本體を失ひ惡むべきの甚しき也。

(ホ) 研に關する雜錄

新刀辨惑錄卷之二に

前略扱横手ノ鎬ハ陰陽ヲ表スル故ニ上リ下リ有ルヤウニ研クル法也、又切先ノ棟ノ留ト鍔下ノ留

トハ研師ノ法アリテ目印等ニモスルコトナリ、畢竟研ギハ下地ニ念ヲ入ルコト肝要ナリ、譬前ノ如ク礎粗末ナレバ忽ヒヅミ出ルガ如シ何程ニ直スト雖直ラヌ者ナリ、研モ亦此ノ如シ下地ノ研方麁末ナレバウハベヨリハ直シ難キモノナリ故ニ研料ハ易キ事ヲ好マズシテ研ガスベキコトナリ、扱亦古ノ研ギニウチグモツヤト謂コトアリ是ハ下タ研キヲ隨分ト念ヲ入レテ少モ手抜キナク至テ細カニ研ギ上テ拭ヒテ薄ク入レル故ニ其作々ノ地性ヲ顯シテ道具ノ位モ分明ニ見エルモノナリ然ルニ近頃ノウチグモリノ研ギハ昔ト違ヒテ浮雲ヲヘダテ、月ヲ見ルガ如ク分明ナラズ、古傳ヲ好ム人ノナマチキニウチグモリツヤヲ好ムト雖一體下タ研ギ麁末ノミナラズ初心ノ者ニ研ガセル故ニ昔ニ及バザル筈ナリ、去レバトテ餘リニ黒ク拭ヒヲ入ル、ハ別シテ卑シク見エルモノナリ云云。

硯記に窓明のことあり

前略又其硯のかたすくに窓明とて二寸三寸のほどときて見るべきことをなすしぎまあり、其心得なければ撰ひにはあ〇(一字不明)ましきことあり、このしぎまは打おろしは前にしるすをれぐいにより始るなりさもあらぬさび身などは大方上鏡寺のよりとぐなり、又砥順をはぶきては上鏡寺の違より砥をあて下をならし中名倉にて其上をまた筋違にとき又同じ砥にてたつをつきあはし砥をひき上引きを使ひてぬり砥にも水仕立にもなし又はぬぐひを入れもするなり、此しぎまははなしがたきわざにはあらず度々窓明などして心見るときには自ら地鐵のよしあしも刃の味ひも分れて心得ること種々あるなり。

刀劍秘寶に硯師が藁火を用ゐて刀劍をあぶり又は熱湯をかけて研ぐ爲めに刀劍の靈妙なる點を失すと云ひたる説あり。

前略是太刀ニ靈妙アリテ彌事中大惡事災難ヲ遭ルベキナリ、然ルヲ研屋トグ時ニ道具堅ニ依ツテ

藁火ヲ以テアブリ道具ヲ柔カニコナシテ研グ、謂レハ研グ時ニ道具カタケレバ刃先ニコボル、コトアリ又一日カ、ル所ニ三日モカ、ル依之皆アブル也、就中冬研グニハ彌(彌?)アルブ寒ズル朝ナドハ湯ヲ玉ノ立ツ様ニワカシ、一朝ニ五度モ三度モカケル是ヲ研屋深ク秘ス事也、拭ヒニ入ル寸ニハ必三湯ヲカケ拭フ也、上作大焼刃ノ道具又備前物ナドニ切レノ惡シキ多クアリ是皆如右ニ研屋ノアブリタル故ナリ古身焼刃ノ上白クウルミテ見エルハ皆アブリタル道具ニテアマク成ツテ不切ナリ、去ルニ依リ古身ノ上作ニ胴ノ快ク落ルハ稀ナリ皆研屋ノナスワザナリ、(中略)見事ナル物アリテ今ハ名斗名物ニテ道具ハ名物ニテナシ昔ノ上作ノ地膚ハアブラレテ皆失ルナリ嗚呼情ナキ哉名人ノ焼込メ置ク火ヲアブリヌク依之靈妙不思議アリタル太刀モ今ハ何ノ靈妙モナシ、右焼キコメヲク火ヲアブリ抜クトハ焼刃ヤクトキ焼コミタル火ヲ又後火シテアブレバ前焼刃ヤク寸焼込タル火ハ抜ルナリ、(中略)アブリテ刃ノ上ノ白クナルコトハ正眞ノ火ハ消エテ跡ニ烟リノ殘リタルナリタトヘバ火事ノ如シ、(中略)扱亦古身焼刃細直グノ道具ハ刃ノ上白クウルミタルハナシ謂レハ細ク直グハ焼少ナク地多キニ依ツテ研クニ柔カナリ地ヲ研グ内ニ刃ノ上ヲノヅカラ研ケルニヨリアブルコトナシ故ニ細ソ直グハ能ク切ル、ナリ是アブラザル故ナリ、(中略)右刃焼キ込置ク火ハ焼刃アラン限リハ千年モ二千年モ不消ナリ、(中略)武士ハ人々古キ火五百年千年マデノ火ハ所持スルニ火トハ不知ベ刀脇差ト斗心得ルナリ、(中略)研屋ニ火ヲ消サレ靈妙モナク人ヲ切リテモ不切堅物ヲ切レバ或ハ曲リ或ハ折ル、是火ノ消エタル故ナリ、又焼刃ノ強キ道具ハ山路ニ入りテ火ヲ求メ度キトキハ切先ニテモ鉤元ニテモ又峯焼アラバ峯ヤキニテモ石ヲ以テ打チ火ヲ出スナリ、相州物峯焼アルハ是火ヲ打ツベキ爲メナリ、(中略)右火ヲ打ツ時ニハ山中ノ腐リタル朽木ノホクチヲ取テハハキ元ニテ打ツ時ハ鏝ノ上ニ置テ打ツ、切先ニテ打ツ時ハ峯ノ歸リニテ打ツナリ、切先一分二分ホドノ間ダ刃ヲ引テ打ナリ、(中略)研屋アブリタル道具ハ火ヲ出シ度存テモ不出也、(下略)。

段々ニ記ス如ク古身ノ上作其ノ古ヨリ研屋アブルニヨリテ此アブリタル膚ノ色古身ノ上作其ノ膚色トナレリ、依之研屋ノ似セ物仕其當世ノ筒鍛打捲ノ道具膚細キヲ皆アブリテ古身ニ似セ本阿彌方へ遣セバ膚色古身ノアブリタル上作ト同事ナル故其出來ニヨリ何ニナリ共極リテ代リナク古作モ古ノ研屋藁火ニテアブリ今ノ作モ今ノ研屋藁火ニテアブルナラバ火ハ同ジ薪ハ同ジ藁火其打タル鐵モ今打ツ鐵モ鐵ハ同ジコトナレバ如何ニシテアブレバ古作ニ成テ代付クナリ、猶あぶることに就ては新刀辨疑及校正古刀銘鑑に

前略砥法を略し或は火を以て煖め利劔を鈍にして磨を速にし云々。(新刀辨疑卷之一)
前略庸工刃のかたきを厭ひて藁灰に投して刃をなますものあり、地刃のさかいうつとりとして武用に妨あり云々。(校正古刀銘鑑四)

察刀規矩に新刀を古刀に變ずることを云ひたるあり。

前略誘き偽りて新刀を古作に變ずるとも研ぎは其法にかゝはらず、其の道具の肉置切先、むね、鑄平ともに出來次第研一面に強く押しして名倉筋違堅ともに砥目の曲りにも不構して合せ砥を研ぎ合せ砥の時は精根次第限りなく研て鐵の草臥るほどに研ぎ其後ち艶をつかふにも作法を不辨取り隠しといふ物にして只すら刃を白く地を黒くと地刃を分け又ぬぐひには青砥の粉に色々の配劑薬を加へ續を以てほぐとして無限黒くなるまでにぬぐひを入る也、夫故仕上たる所は地黒く刃眞白になりて鐵性わかり兼る、如此なれば其實は目利も黑白と薄さと厚さとを目利するのみにて索性鍛目等出來不出來を目利するにあらず、譬ば戲場の俳優紅白を以て顔色を彩色艶然たる薜花の顔色も忽ち如棗紫髻方口綠眼如電光變ず、(中略)然れども元來の素性は人也、其常の顔色を見ざれば生得の美惡は知る事叶ふまじ、今黑白の研も右の如し生得の美惡しれざるやうに研きしもの也、たま〜法の如く研ぐ者あればたとへば新刀を古刀と變化すと雖も鐵性鍛目を能く知りて研ぐゆ

へ是は正宗彼は貞宗とも變ずべき道具なれども研の食卒(忽卒?)ゆへ何々の肌出でず、此は何國鍛にて鐵性は何々故堅はこふく合砥はかよふくと其素性を能く見分る也、然れども前編に(砥順に就ての部参照)上鏡寺中名倉こま名倉合砥と順に研ぐ方委しく顯し置く如くよく法の如く研ぎ其掌の内には是と彼と淺深厚薄の力を用ゐて研ぐ時は正宗と變ずる道具を以て正宗となし摺上げ無銘ならば正宗が甦りて見ればとても我を誘くとは云ふまじ、加此(如此?)なれば作者を補左すると云とも恥かしかるまじ歟、都て其素性によりて變化せば埋れある道具を顯し知らすものなり、只正宗にも貞宗にも其變ずべき素性を換む事專一なるべし。

新刀可變古作鍛冶

大興五水田國重郷義弘正 宗に變ず 若部水田國重薩州正清、安代其の外薩州打に變ず 同爲家右同斷 國光延壽新藏王の類に變ず 江戸水田國光肌物は則重に變ず、肌なきは相州

行光正宗貞宗の類に變ず 前肥忠吉初代出羽鐵にて打たる直、燒は延壽一派に變ず 山城守國清忠に菊を切たる細直燒は來、國光延壽新藏王の類に變ず 肥前伊豫椽宗

次右同斷 出羽大椽國路正宗貞宗に變ず、能々變化の術になれたるものあるか、飛驒守氏房相州行光、正宗貞宗の類に變ず

若狹守氏房右同斷に變ず、下通りに仕立れ、若狹守氏房右同斷に變ず、丸津田助廣の類に變ず 越前康繼初代細直燒に來、國光に變ず、合、同三代目正宗貞宗郷義

同五代目右同斷に變ず、又は堀川國、廣相州行光の類にも變ず 同六代目右同斷 石堂是一及善四郎一峯丁字亂に燒たるは古備前一文字長光、忠光の類に變ず

越前兼仲砥目鍛にて帽子はきかけ、燒つめに見ゆるとき、は保昌五郎に變ず、此あらざれば繁慶と變ず

右の鍛冶の外變化すべき道具あまた有之といへども極めて變化しよき道具は此品々にありて予がたしかに見しり覺えある類あらまし人の見やすからん事をはかりて記し侍りぬ(下略)。

新刀辨惑錄卷之二に打卸刀の研及研の時節に就いて云へり。

打卸ノ刀ハ三四度モ研ガザレバ沸、匂、地性等モ顯レカヌル故ニ度々研グニシクハナシ、尤乃肉ノ脱セザルヤウニ研ガスベキコト也。

研ギハ冬月宜シ別シテ寒研ヲ好ンデ暑中ヲ忌ムコトハ寒中ハ水性清澄ニシテ鐵性モ收斂スル故

二 鑄出ズ又火剋金トテ火ハ金ヲ害フモノナレバ炎暑ハ火旺ノ甚シキニ因テ鐵性涌沸シテ鑄出易ケレバナリ、故に暑中ヲ忌テ冬月ニ研ガスベキコトナリ、併三四月亦八九月ノ研ギモ可ナリ。 硯記に砥石の寸法を云ひたり。

砥石は長さ一尺などにて四寸の巾なるをよしとすること定りなるにては廣き石は硯にくしとて一寸五分二寸ほどもはゞあるをよしとするもの故地むら多くつきてしのぎよく立がたし、是は工みのつたなきと早くときはたさむとのしわざよりなり、廣き砥はちのづからむらはつがざれども扱ひがたくしてひまどるなればせまき石にてみだりにたつなどをつくこと大かたならひとすることとはなりたり云云。

(へ) ネタバに就て

察刀規矩に

世に秉ねたばを合すといふ事ありこれさして用ゆるに足ざる事なり、ねたばを合するは剃刀の手合をするやうなるものにて小切れのためなれば大業に至りては詮なきことなり、そのうへ急變に逢ひたる時俄にねたばも合し難し、又かねてあはせ置くときは程すぐれば刃ひけてもとの如し、しかれば用ゆるに足らざること知るべし。(下略)。

古今鍛冶備考卷之一に

前略近世刃肉及び刃を出す仕法は粗く容貌を彩る仕立の法は精く成り研上げたるまゝにて物の切るゝ刃に仕る心は更になき故に人毎に根太刃を合せざれば切れ悪きものと心得るは誤也、然れども此風因循しぬれば根太刃を細く合せて帶すべし、根太刃を合す法は先づ常見寺砥にて刃をよく居へ夫より名倉砥にかけ其上は合せ砥を篤と研ぎいかにも刃まへを細かに銚まで刃の出合を考て合せ込むべし、其うちに差別あり鐵合せ堅さと脆きものは水をひかへ砥汁を少くして名倉

砥限り合せ込也、合せ砥をかければ切れ悪しさればとて常見寺の砥目ありては切れあしきものなり、又剛柔持合韌き鐵合のものは水を度々かけ砥汁を多くして合せ砥を篤と合せ込む程刃勝て良なり。

刀劍會誌第三十三號の雜錄、刀劍雜話と題したる條下に

刀劍にねた刃を合はするは名倉砥を用ふ名倉砥にも其差あり上をチウと云中をコマと云下をムシコラリと云上砥の小さにて筋違に兩方より合するなり、尤手加減あり度々試みたる上ならでは大節の刀を損ずべし、陶物結肌物は至て切宜しけれども甲冑の上には宜しからず、又早寢刃といふ事あり八月十五日酉の刻に墓の皮を剝とり陰干にし事に臨み刃を拭へば本寢刃になりて六具着込の類も切るゝと云劍術者の秘事とする事なり、試みて用ふべし。

(武學拾粹)

硯記に

ねばきを合すことは引たる刃をつける迄にていさゝかされるを助くるのみなれば剃刀の手あはせと同じければやくなきことと云ふかたあれども一かたの論にてことにくわしからぬなり、剃刀の手にて合せざればさくあしく刃はむけやすきものにてものにふれずしておくとも硯てほどふれば刃先しらみてむけぬれば其引たる刃を付るなり、そのことをねたばを合するとは云なり、大わざをせんにはねばきはやくなきなどといへど刃のつよく引ては切がたき故に鎧のうへの勝負の外にはねたばを合せることは古くよりせしことなり。(下略)

猶此硯記の著者はねたばの記を著し其方法を詳説せり。

ねたばの記に

前略

一、ねたばは砥に筋違にあつると横にあつると立置て堅にあつるとの三品あり、夫がうちに筋かひ

には大筋かひ中筋かひ小筋かひの三種なり、傳説に刃のかたきは筋違に刃を付るをよしとし柔らかにすぎたるは堅に付中は横に附るをならひとはする也。

ねたばの付かた右五品なり、(中略)又ねたばを合するに砥の次第ありよく付んと思ふには初常見寺にて付次に名倉にて付次に合せ砥にて付べし、何れも砥石の堅きは宜しからずいかにも常見寺は石質の細かなるをよしとす、名倉には中名倉細名倉の二品あり、極めてよく刃を付んとおもふ時は常見寺より中名倉次にこまなぐらと順にかくべし、大かには中名倉にても細名倉にても一種かけて其上を合せ砥にて能々とぎて刃を立べし、右の順に砥數を用ゐて初めより筋違にも堅にも横に押べきことなり、又云刃の多く引けざる刀は常見寺を除き直に名倉をかけ次に合せ砥をかくべし、又略には合せ砥のみをかくることも有べし、すぐれたる業物などは引たる刃も合せ砥のみにて可なりとすべし云云。

一、略法兼てねたばをあはせ置ず俄に切こゝろむるときには合せ砥へ水をかけて刃先を表裏とも堅に數遍強からず下より上へするべし、合せ砥にも品々次第あれども諸家髪そりを研砥は善惡とも合せ砥なれば何れにも所持有こと必定なり云云然れどもかたきは大かたあしゝと知べし。

一、ほふのねたば白鞘の柄木を用ゐて可也とす、厚朴はふは木柔かにして強く鐵に付て錆を生ぜず、故に古へより柄木鞘木に多く用ゆるなり是も前に記すごとく刃をたてに表裏よりあまた摺するべし、又角木にて手に持かぬる時は其木を下に置いて研石にてとぐごとくたてに摺べし云云。

一、藁ねたば、合せ砥厚朴の木等なきときは藁を手一足に束ねて其平面にて刃先を除て堅に下より上へするべし、刃先へ當るときは藁は刃をつぶすものなれば先を厭ひて刃の立よふに靜かにするべし、又藁なきときは藁草履又中ぬきぞふりにても刃先へあたらざる様にして刃を立べしわらじも同じ。

一、砥なく厚朴の木なく藁の類なき時は松杉檜桐の類かたからぬ木にて下より上に刃を平より摺なりあまた磨すべし、木かたしとあもふ時には靜に力をこめてするべし、木やはらかき時はいさゝか力を込べし、又なめし革さらしたる白革を板の上へ敷き、夫にてもすべし、又竹の皮の表、木綿切、奉書紙、杉原紙の類ひを板の上へ三枚程かさねて置て、軽く筋かひにをしても刃先いさゝかは付なり。
(下略)。

以上を總轄して之を約言すれば、研の最も大切とするところは其刀劍の徳を顯はし肉置を調へ鐵性の如何、或は肌模様を明かにするにあり、而して夫等を充分になしとげうる者は研の上手にして其上手の研ぎたる刀劍は地刃共に少しのむらなく鑄直に通じて端正にして美しきものなりとせり。其刀劍の肉置悪しきときは切味の鈍きは無論にして又帽子先の肉置あしきものは強く打込みたる時帽子先の打折れることあるものなりとせり。要するに肉置は鉦元より帽子先迄過不及なくよく釣合のとれてむらのなきものを可とし、其むらのなき研を生と云ひ又むらのつきたる研を死と云へり。

砥順はオレクイを以て荒研をなし次にウナカミもしくは神子濱を用ゐてオレクイの砥目を去り次に常見寺を用ゐて前の砥目をとる、此時横手鑄の筋よく立つものなりとしたり、次は名倉之には大中小の三段ありにて大筋違、小筋違及び堅に研ぎ、次は合砥(刃トギ、地トギ)の二段ありにかく、此合砥に使用する砥石には内曇、紫、白砥(刃トギ、淺黄、枇杷砥(地トギ)等あり而して是迄を下地研と云ひたり。

これより後は仕立上と云ひて上引(刃ツヤ、地ツヤ)の二段ありにかけ次に對馬砥又は金肌等を以て拭を入れ最後に鐵製の研針に磨ぎ、研磨を終るとせり、猶研磨は下地研大切にして夫を入念せざれば仕立上も従つて好結果を得ずとなしたり。

其諸説の中より砥石の名稱を抽けば左の如し。

折枕 神子濱 ウナカミ 常見寺(常鏡寺、上建寺) 名倉(大、中、小) 淺黄 枇杷砥(柿砥) 内曇 白礪
 (白砥伊) 白研梨地目(前者と同一物?) 紫 對馬砥 青砥等なりとす。

又拭は薄く入るゝをよしとし、夫を入るゝ打熱湯を刀劔に灌ぐことを非としたると不然としたる説あり、また金肌拭を排したる説もあり。

熱湯をそぐぐことは理想的に云へばたとへ一回なりと云へどもかけざるを可なりと思考せらる、況や校正古刀銘鑑の例言の如き小刀を鍋に入れ終日煮沸云云は全然首肯なしがたき所也。又藁火を用ゐる刀劔をなまして研ぐ云云の事は諸説一致して其非をせめたり。其中に刀劔秘寶の説は注目に價す、其刀劔を火打道具に使用すと云ふ奇抜なる點は暫くおき、古刀の上作の刃色の白きは即ちあぶられたる爲めなりとしたる部分なりとす。

ねたばを合することは剃刀の手合せの如きものにして常見寺、名倉、合せ砥等によつて夫をなし略法としては藁或は樹木などによりてなすとせり。

最後に本資料を抽出したる刀劔書の題名を掲ぐべし。

古刀銘盡大全 校正古刀銘鑑 古今鍛冶備考 近古鍛冶刀劔得失考 新刀辨惑錄 新刀銘盡
 新刀辨疑 劔工秘傳志 刀劔秘傳志 刀劔雜話 刀劔秘寶 刀劔固癖錄 刀劔拓問草 察刀規
 矩 劔記 ねたばの記 刀劔會誌(武學拾粹)